様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７００２６

研究課題名（和文）「人間のいのちの尊厳」に関する哲学的基盤研究

研究課題名（英文）Philosophical research on "the dignity of human life"

研究代表者
森岡　正博（Morioka, Masahiro）

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：８０１９２７８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、以下の成果が得られた。（１）人間のいのちの尊厳は次の三つの柱によって構成される。すなわち「人生の尊厳」「身体の尊厳」「生命のつながりの尊厳」の三つである。（２）大統領生命倫理評議会のレポート『死の決定論争』の論理構成は間違っており、再考されなければならない。（３）「人生の意味の中核部分」が人生の意味の哲学における新しい概念として提唱された。これによれば、人生の意味はなにものとも比較することはできない。（４）「人生の尊厳」は人生の「独在性」に位置付く。人生の意味の中核部分も同様である。

研究成果の概要（英文）：In this research the following results were obtained: 1) The dignity of human life is constructed by three pillars, namely, "the dignity of one's life," "the dignity of the body," and "the dignity of the connectedness of life." 2) The logic of President's Council on Bioethics's book "Controversy in the Determination of Death" is wrong and should be reconsidered. 3) The "heart of meaning in life" was proposed as a new concept in the philosophy of meaning in life. According to this approach, meaning in life is never to be compared with anything. 4) "The dignity of one's life" is situated in the "solipsisticbeing-ness" of one's life. The heart of meaning in life is also situated there.

研究分野：哲学

キーワード：尊厳　人生の意味　生命倫理

１．研究開始当初の背景

申請者は「人間のいのちの尊厳」の観点から現代の生命倫理学に対して批判的にアプローチし、自己意識と理性を中核とする生命倫理学の人間観を哲学的に再吟味することを目指して本研究をスタートさせた。

またその過程において、「尊厳」の概念にも新たな光を当て、「尊厳」と「いのち」の関係性を根底から問いなおそうとも考えた。従って、本研究は生命倫理学における研究であると同時に、現代哲学における尊厳概念の研究としても構想された。

２．研究の目的

「人間のいのちの尊厳」の観点から生命倫理学にアプローチすることが本研究の目的である。当初の研究計画としては、（１）「尊厳」概念の思想史的研究、（２）「尊厳」概念から見た「ペルソナ」概念の研究、（３）「尊厳」概念から見た「まるごと論」の研究、（４）「尊厳」概念から見た「サステナビリティ」概念の研究の４つの柱で、申請者の独自の研究を進めていく予定であった。

まず「尊厳」概念の思想史的研究を発展させることによって、それを「人生の尊厳」「身体の尊厳」「生命のつながりの尊厳」の三つのフェーズにおいて捉えることができるという発想に至った。また、研究途中より、「尊厳」概念を「人生の意味」概念と接続させる可能性に気づき、分析哲学における「人生の意味の哲学」との相互検証を行なうことになった。その結果として、本研究は「尊厳概念と生命倫理学」および「尊厳概念と人生の意味」という二つの柱へと収斂していった。このような形で、当初の研究目的を遂行することができたと考えている。

３．研究の方法

研究は文献を用いた哲学的手法によった。そのうえで、本研究が主催・共催する講演会、シンポジウム、研究会、勉強会等において申請者が研究発表を行ない、それに対するコメントをもとに応答を継続し、研究内容を深めるという手法を取った。

文献としては、現代生命倫理学、西洋の尊厳論、現代の人権論などを中心に、途中からは分析哲学における人生の意味論、心理学における意味論などを追加した。

また、ヨーロッパを中心として発足した欧州日本哲学ネットワークに一年目から積極的に参加して研究成果を発表し、コアメンバーらと研究交流を深めた。その結果、日欧間での将来の共同研究の可能性が開けてきた。

４．研究成果

研究成果は、当初予想したものの枠を超えて広がり、とくに人生の意味論との接続によって新たな研究へと展開していった。最終的にはおおよそ以下の四つの成果を生み出した。

（１）「人間のいのちの尊厳」概念の考察

研究前から構想していた三つの尊厳概念に厳密な規定を与えて考察した。三つとは、「人生の尊厳」「身体の尊厳」「生命のつながりの尊厳」である。これは、いわゆる「人間の尊厳」と呼ばれてきたものを、いったん解体した後に再構成して、人間とその環境にまで拡大したものである。これは申請者の独自の尊厳概念として提唱された。

まず「人生の尊厳」とは、いのちというあり方をした人間が、「人生を生きる」という局面において生を全うすることができるために守られるべき尊いもののことであり、けっして破壊されてはならないようなかけがえのない大切なもののことである。それは、(1) 人生が一度きりしかないこと、(2) 人生の主人公は私でしかあり得ないこと、(3) 人生には成功も失敗もないこと、(4) 最後の

瞬間まで絶望から脱出できる可能性が開けていること、の 4 点にまとめることができる。これらは「破壊不可能な人生の尊厳」として構成される。と同時に、これとは別の次元において、「破壊可能な人生の尊厳」というものがある。これは、「私の人生には〈けっして破壊されることのない人生の尊厳〉がある」という「実感」をもって私が自分の人生を前向きに切り開いて生きていくことができるような状態になっていることである。しかしながら、この「破壊可能な人生の尊厳」は、虐待などによって実際に破壊されてしまうことがある。したがって、この後者の意味での人々の人生の尊厳が破壊されないようにする義務が我々には課せられている。

次に、「身体の尊厳」とは、いのちというあり方をした人間が、「身体を生きる」という局面において生を全うすることができるために守られるべき尊いもののことであり、けっして破壊されてはならないようなかけがえのない大切なもののことである。それは (1) 人間の身体において、まるごと成長し、まるごと死んでいく自然の権利が守られていること、(2) ある人間の身体が外部の人間の欲望によって完全に支配されるというようなことが起きていないこと、(3) 人間の身体がたとえ本来の機能を大きく失い、醜くなり、汚くなり、役立たずになったとしても、その身体が単なる物体以上のものとして扱われることであり、健康な人間の身体が受けるべき敬意と同様の敬意をもって、その人間の身体が扱われること、である。

第３に、「生命のつながりの尊厳」とは、いのちというあり方をした人間が、「生命のつながりを生きる」という局面において生を全うすることができるために守られるべき尊いもののことであり、けっして破壊されてはならないようなかけがえのない大切なもののことである。これは、(a) 世代間における生命のつながり、(b) 社会における生命のつながり、(c) 大自然における生命のつながり、の 3 つの局面において捉えることができる。「人生の尊厳」「身体の尊厳」は個体的な尊厳であるのに対し、「生命のつながりの尊厳」は関係的な尊厳であると言える。(c) の人間と大自然のつながりについて言えば、人間と大自然のあいだに、一方が他方をけっして制圧しないというダイナミックな緊張関係が保たれていることが、大自然における「生命のつながりの尊厳」であると言える。

このような分析によっていくつかのことがさらに派生的に考察された。たとえば、３つの尊厳同士が衝突することはないが、人が人生を全うすることと、３つの尊厳のうちの一つが衝突することはあり得る。それが臓器移植や中絶などの難しい生命倫理の問題となって出現するという見方が成り立ち得る。

以上は本研究で明らかになったことの主要な一部である。これらの点をさらに展開していくことが将来の課題となった。

（２）<u>生命倫理学に関する考察（脳死概念および日本の生命倫理学）</u>

生命倫理学の領域における研究として、脳死概念の再検討と日本の生命倫理学の再検討を行なった。

まず前者であるが、脳死概念の成立について米国の第一次大統領レポートおよび第二次大統領レポートを批判的に吟味し直した。第一次レポートにおいて全脳死概念が成立したのであるが、その後の長期脳死の発見や脳機能の残存問題によってその前提が崩れ、それらの知見をもとにして脳死概念を再構築するために第二次レポートが発表された。しかしこの第二次レポートには論理的な欠陥があるということを本研究では指摘した。

第二次レポートは「呼吸したいという駆動 the drive to breathe」を人間の生命の根幹に置いた。しかしこのことからは、「自発呼吸と意識が不可逆的に失われた有機体は生きていない」という結論は論理的に導かれない。なぜなら、自発呼吸や意識とは別の、有機体が生きていると言えるための何か他の

十分条件が存在する可能性を、けっして否定することはできないからである。この点において、第二次レポートの主張は根幹から崩れていると考えられる。これは米国の政府見解の致命的な論理破綻であると本研究は主張した。

日本の生命倫理学の再検討は、英語論文⑤および⑥で行なった。日本の生命倫理学はまず草の根の女性運動と障害者運動によって１９７０年代に開始された。そして１９８０年代半ばからアカデミックな学問として英語圏から輸入された。この二つの潮流は別々の場所で展開したが、２１世紀に入ってから相互交流が始まっている。しかし相容れない部分も多く、また欧米と東アジアの文化的差異の問題も無視できない。これらのことを英語論文で世界に発信した。日本の生命倫理学の歴史については国際的にはほとんど知られておらず、その意味で有益な研究成果の発表となったと考えられる。今後もさらに情報発信していくことにしたい。

（３）人生の意味の比較不可能性（尊厳と人生の意味・その１）

本研究の２年目に、ヨハネスブルク大学のT・メッツ教授と共同研究を開始した。それをきっかけに、「人間のいのちの尊厳」の問題と、分析哲学において進められてきた「人生の意味の哲学」が強い接点を持つことに気がついた。そこで、本研究を「人生の意味」の視点から再構成する試みを行なった。その最初の研究成果として、人生の意味の「比較不可能性」の検討を行なった。

メッツは人生の意味へのアプローチを「超自然主義」「自然主義」に分け、さらに後者を「客観主義」「主観主義」に分けた。そして採用すべきは「客観主義」であるとした。これは現代の分析哲学の主流の立場となっている。しかしながら、客観主義では、各人の人生の意味が比較可能なものになる。つまりマザー・テレサの人生の意味ははなはだ高いが、貧乏揺すりをするだけに終わった人生の意味ははなはだ低いことになる。しかしこの考え方は人生の意味を、社会的な価値にほぼ等しいものとして捉えており、あえて「意味」概念を使う異議が乏しいと考えられる。

申請者はそれにかえて、主観主義の中でももっとも強い立場だと思われる「人生の意味の中核」理論を提唱した。それは、人生の意味はいかなる意味においても比較不可能であると主張するものであり、自分の人生の意味と他人の人生の意味の比較が不可能であるだけでなく、将来や過去に判断された自分の人生の意味と、いま判断された人生の意味の比較も不可能という結論になる。そして人生に意味があるかないかは、「ある」か「ない」かの二値であり、そのあいだにグレーゾーンはないとの結論に至る。

これは人生の意味に関する一種の「独在論」であると解釈できる。この「独在性」こそが、人生にかかわる「尊厳」の在処なのであると申請者は結論する。この研究は英語論文④および英語編著書①として結実した。

（４）人生の意味の主体は誰か（尊厳と人生の意味・その２）

次に、「尊厳」の在処である「独在性」とは何かについて、形而上学的な考察を行なった。まず、フランクルの『夜と霧』のドイツ語原典を詳細に検討し、フランクルが人生の意味の担い手と考えている「全宇宙に一度かぎりそして比類なき仕方でもって立っている」存在こそが、ここで言う「独在性」の担い手であると解釈できることを示した。尊厳と人生の意味と独在性は、ここで結ばれるのである。

さらに「独在性」の問題を形而上学的に考察してきた永井均の業績をこの視点から再検討することによって、申請者の思索を広げることができた。すなわち、「独在性」の担い手のことは「独在今在此在的存在者」と呼ばれるべきであり、それが誰であるかは二人

称的な指差しによって確定指示される。そしてその存在者を構成するものとして、「現実性」「現象世界」「客観的世界」が三本の柱となっている。この独在今在此在的存在者こそが人生の意味の担い手であり、尊厳の担い手である。「人間のいのちの尊厳」の研究において見出された「人生の尊厳」が、ここにおいて「独在論」と結びつくのである。この論点は、本研究の大きな発見である。まだ荒削りな段階に止まっているので、今後の研究によってより説得力の高いものにしていきたいと考えている。

以上の研究成果は、著書や論文の形で発表された。また、国際学会・国内学会での発表および研究交流によって、今後の国際的な展開の基礎を固めることができた。これを足がかりにして、日本から世界に向けて独自の哲学思想を発信していく準備が整ったと申請者は考えている。

サステナビリティとの関係については本研究で取り扱うことができなかった。今後の課題として引き続き検討していく。

以上をもって、当初の研究計画で意図されていたことはおおむね達成できたと自己評価している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　9　件）

① 森岡正博「独在今在此在的存在者 ― 生命の哲学の構築に向けて（９）」『現代生命哲学研究』6、査読無、2017、101-156
② 森岡正博「フランクル『夜と霧』における人生の意味のコペルニクス的転回について」『The Review of Life Studies』7, 査読無 2016:1-19
③ 森岡正博「「誕生肯定」と人生の「破断」を再考する：生命の哲学の構築に向けて（８）」『現代生命哲学研究』5、査読無、2016、13-27
④ Masahiro Morioka, “Is Meaning in Life Comparable?: From the Viewpoint of ‘The Heart of Meaning in Life’”. *Journal of Philosophy of Life* 5(3), 2015:50-65　査読有
⑤ Masahiro Morioka, “Feminism, Disability, and Brain Death: Alternative Voices from Japanese Bioethics.” *Journal of Philosophy of Life* 5(1), 2015:19-41　査読有
⑥ Masahiro Morioka, “Why Beyond Bioethics?: The Reaction of a Japanese Philosopher to American Bioethics.” In *New Perspectives in Japanese Bioethics*. Ed by Alexandra Perry, and C.D. Herrera, Cambridge Scholar Publishing, 2015:73-86 査読無
⑦ 森岡正博「「人生の意味」は客観的か－Ｔ・メッツの所説をめぐって」『現代生命哲学研究』４、 2015: 82-97.査読無
⑧ 森岡正博「「人間のいのちの尊厳」についての予備的考察」『Heidegger-Forum』vol.8, (2014):32-69. 査読無
⑨ 森岡正博「生命の哲学から見た脳死概念の一考察」『哲学論叢』第４１号、京都大学、(2014):13-23 査読有

〔学会発表〕（計　10　件）

① Masahiro Morioka, “The Concept of Persona as Seen from the Perspective of Philosophy: Brain Death, No Play, and Robots.” DIG Workshop: Humans & Machines in Medical Contexts: Case Studies from Japan, 2017/3/31 ドイツ日本研究所 東京
② Masahiro Morioka, “The Concept of Persona in Watsuji and its Importance in Contemporary Bioethics.” Second Annual Conference for European Network of Japanese Philosophy, 2016/10/10 Universite Libre de Bruxelles, Brussels.
③ 森岡正博「トロッコ問題と原爆投下」『応用哲学会第 8 回年次大会』2016/5/7 慶應義塾

大学　東京
④　森岡正博「「いのち」をものがたるということ」『第 22 回日本臨床死生学会』2016/11/9　早稲田大学　東京　基調講演
⑤　Masahiro Morioka, “Why Was the Book “An Introduction to Philosophy in the Form of Manga” Written?” First Annual Conference for European Network of Japanese Philosophy, 2015/12/4 University of Pompeu Fabra, Barcelona
⑥　森岡正博「現代日本の生命観と社会」『日本保育学会第 68 回大会』2015/5/10 椙山女学園大学 名古屋市
⑦　森岡正博「「産む」とはいったい何をすることなのか：ひとつの概念分析」『応用哲学会第 7 回年次大会』2015/4/25 東北大学 仙台市
⑧　森岡正博「生きてきてよかったと思える人生とは」『第 39 回日本自殺予防シンポジウム：日本自殺予防学会総会』2014/9/13 北九州国際会議場 北九州市　招待講演
⑨　Masahiro Morioka, “Persona, Another Aspect of the Concept of Person.” The Second Conference on Contemporary Philosophy in East Asia, 2014/8/29 京都大学、京都市
⑩　森岡正博「人生に意味はあるのか？」『応用哲学会第 6 回年次大会』2014/5/11 関西大学 高槻市

〔図書〕（計　2　件）
①　Masahiro Morioka (ed.). *Reconsidering Meaning in Life: A Philosophical Dialogue with Thaddeus Metz*. Journal of Philosophy of Life. (2015):1-278.（編著図書）査読有
②　森岡正博『脳死概念における人格性と尊厳の哲学的研究』kinokopress（2015 電子書籍頁数無）査読無・博士論文

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）
○取得状況（計　0　件）

〔その他〕
特になし

６．研究組織
(1)研究代表者
森岡　正博（MORIOKA MASAHIRO）
早稲田大学・人間科学部・教授
研究者番号：80192780

(2)研究分担者 なし
(3)連携研究者 なし
(4)研究協力者 なし